

開催にあたって

新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの生活に多大な影響を及ぼしています。当館でも、感染症対策のために4月19日から臨時休館するとともに、今年度に予定していた一部行事の中止や展覧会の延期等を決断せざるを得ませんでした。5月12日に再び開館してからは、ご来館の皆様のご協力をいただきながら感染症拡大防止対策を講じて通常開館をしています。

さて、本展示は、当初予定していた展覧会の延期に伴う特別展示です。昭和の一関を代表する洋画家である白石隆一が、1950(昭和25)年の6月から8月にかけて描いた、43点のスケッチを展覧いたします。

スケッチが描かれたのは、今からちょうど70年前です。この年は太平洋戦争の終戦から5年目で、国土も人心も未だ荒廃が続いていたものの景気が急速に上向いて、崩壊していた国民生活の回復が加速し始めました。しかし、一関地方では1947、48(昭和22、23)年と連続して発生した大水害の余波が残っていました。

白石は終戦の年に、長く住んでいた東京から千厩(現一関市千厩町)の実家に戻って来ており、1950年頃は、平泉や一関、三陸海岸などに足を運んで制作に精を出す日々を送っていました。40歳代半ばを迎えていた彼は画家として高く評価されながらも、地方での活動が圧倒的に不利であるため再上京を望みましたが、叶えられずにいました。そうした中で描かれたのが、この度ご覧いただくスケッチです。

白石が目に向けたのは、ごくありふれた草花や魚、自宅で育てていた野菜です。夏の暑さの中で花開く植物や、つい今しがたまで銀鱗を躍らせていた海の幸といった身近なモチーフを、好奇心旺盛に新鮮な気持ちで見つめ、生き生きと表現しています。

不安感や閉塞感が社会を覆い続けている現在、ふだんの暮らしの中にささやかな楽しみや喜び、安らぎや希望を見出すヒントが、白石のスケッチには秘められているように思えます。本展示が、皆様の心にうるおいと癒しを与えることができれば幸いです。

令和2年6月

一関市博物館